

・・・記憶の糸を手繰り寄せ・・・

昨年4月、山下さんの後任として住民協に参加して一年が過ぎ、今年度、山の根親交会の会長職を龍崎理事から引き継ぎました。私には全く不向きな地域活動をよくもまあ身の程知らずに安請け合いましたものだと思ひはあきれ顔です。今回鈴木為之理事から文章依頼についても住民協と関係ないトンチンカンな私事を書き留めてしまいました。

今年4月1日に見田宗介という社会学者がなくなった。私には忘れがたい青春の時に読んだ「展望」という雑誌の中に掲載された「まなざしの地獄」という論文でした。後年執筆者が見田宗介とわかったのだが、社会学という学問分野は1970年代頃にはほとんど認知されていなかった。「まなざしの地獄」の内容は、当時、世間を震撼させた連続ピストル射殺事件を扱っていた。その事件を起こした時(1968から69年)永山則夫は19才で私と同年であり、私は寺山修司の「家出のすすめ」など読んで都市の雑踏に紛れ込み、家族、社会制度それらすべてからの反逆を企て、東京のポロアパートへ飛び出した時期だった。新聞に映し出された俯く永山は寺山に似ていた。記事内容を読み、何かしっくりこない違和感があった。暫くして永山則夫の手記「無知の涙」そしてこの雑誌の「まなざしの地獄」を読みながら、特別な人間の生き様を通して普遍的な人間に繋がる存在証明を画家がしっかりと書込み、その背景を綿密な描写で写し取るような技法に唖然とした記憶が今も忘れられない。50年余り過ぎ見田宗介の弟子の大澤真幸の本「夢よりも深い覚醒へ——3・11後の哲学」に触発され再度見田宗介の本を何冊か読んでみた。そこには見田の人類の築いてきた文明に対して深く鋭い洞察力とその行く末についての危機を読み取ることが出来る。

校区住民協 副会長 加藤 富士男
(山の根親交会 会長)

令和4年6月度役員会

開催日時と場所：2022年6月4日(土)13時
議題

30分～15時35分、久木会館、参加者：23名
(内役員14名)

(1)行政からの連絡事項

①生ごみの広域処理対応に関する件(資源循環課)
葉山町と共同で行う生ごみの堆肥資源化処理に伴い実施予定の生ごみの分別収集に向けた計画の説明と、本件に関する市民説明会スケジュールの紹介があった。

- ◆本件に関し、下記の意見が出された。
- ◆説明会の開催場所・参加可能人数を増やすこと。

(2)事務局からの報告事項

①市住民協連絡会(5・27)報告

◆空き家対策：関心は高いが実効が伴わない。市長から貸し手がほとんどないのは、制度上の見直しが必要として検討する時間が欲しいとの発言があった。

→行政回答：今回は議会提案前の説明であり、9月以降もきめ細かく開催を予定する。

◆葉山との共同処理に伴う費用分担は。

→現在検討中、議会提案までには結論を出す。

◆家庭での処理容器購入助成と共同処理設備建設費用との最適点を検証することが必要ではないか。

◆分別処理困難者へ配慮した制度設計を望む。

◆小坪協：徐々にイベント再開、ウクライナ支援募金を実施した。

◆沼間協：アーデンヒルで実施したデマンドタクシー事業は自治会負担で70万円の赤字を生じた。制度設計上問題があったのではと報告があった。

◆事務局より：連絡会の本来の機能は根本的に議

論をかわすことだと思うが、うまく機能していない。また、住民協の役割は傘下の自治会の共通の問題解決の手助け、行政への住民の意見具申にあるとの所感が述べられた。

②「都市機能の整った快適なまち推進懇話会」(5・20) 報告

◆下水道処理：大規模な改修が必要となっており、

(3)審議事項

①今期役員会等で取り上げたいテーマや招聘先

◆事務局より原案説明の後協議の結果、「若手グループの地域活動」を最優先テーマとし、子ども部会で意見交換会の準備を進める。

◆独自の防災体制が進んでいる亀ヶ岡団地の事例紹介をしてもらい、意見交換を行うために小坪住民協に打診する。

②5月22日実施朝市の報告

地域交流の場として機能し始めている旨の報告と、会計の報告があった。

③各部会報告

◆減災部会：28日に今年度初めての部会開催。各自自治会・自主防災組織の活動状況、取り組みを紹介してもらい、意見交換を実施する。災害時の在宅避難者の支援方法、情報の集約方法などを検討していく。

◆子供部会：朝市で弁当を販売した。ふれあい部会との緩やかな協調で可能な活動を考慮してゆ

現設備を改修するか、葉山と共同で新設を計画するか検討中である。電力は再生可能電力を使用予定。

◆JR 東逗子駅前空地の活用：国の助成金を活用して点在する市関係施設を集約したビルを市所有の土地に建設することとなった旨報告あり。

く。

みんなの食堂の実施が難しいので、地域交流の場として「久木みんなのカフェ」を久木会館で開けないかの検討を始めた。

◆ふれあい部会：地域包括ケアの概念はあるものの、具体的な地域活動に落とし込まれていないこともあるが、ふれあい部会と地域とのかかわり・距離感を詰めてゆく必要がある。

◆久木会館：4.5月の利用者が多く、収支も好決算であった。「まちの子育ち」の解散による残余金から、会館に10万円の寄付を受けたので、電子ピアノの更新にあてる予定。

④新会員承認の件：新に久小PTA会長に就任された飯岡重子氏の入会申請があり、承認された。

(4)その他：岡田氏(久中PTA会長)より、11月5・6日に亀ヶ岡神社でコミュニティパークを開催する旨、また久中のバザーを復活させる予定であることが報告された。

《レポート》 「ゆたかさんの毘沙門暮らし」

当会会員(三浦市在住) 細野 裕

< 毘沙門の沙羅 >



祇園精舎の鐘の声
沙羅双樹の花の色
おごれる人も久しからず
偏に風の前の塵に同じ。

諸行無常の響きあり。
盛者必衰の理をあらはす。
ただ春の夜の夢のごとし。

沙羅とヒメシャラ
の木をこの毘沙門に
植えて12年になる。
なかなか咲かない花
の木と思っていたら

この15年目にして咲き誇るようになった。

可憐な花をいくつもつけて、私を楽しませてくれている。白の基調に薄い桃色があしらわれている。そして一夜にして地に落ちる。散らばって落ちる。墮ちたところがまた好い

< 毘沙門に暮らすこと >

ほんとのことを言うとこの毘沙門に住むことは、いやだった。不便だからがその理由。車がなければ、私的にはどうにもならないと思った。近所の方々は、四軒。みなさんプロの農家である。朝は、六時半には軽トラックのエンジンをかけて、仕事場であるそれぞれの畑に出かけていく、その軽トラックのエンジンをかける音と農家の方の声高

なやり取りで、否応なく目が覚めてしまう。ここにきて変わったことの第一番目は、早起きになったことだ。いや正確には、早起きにさせられたである。ま、いっか(いいか)である。

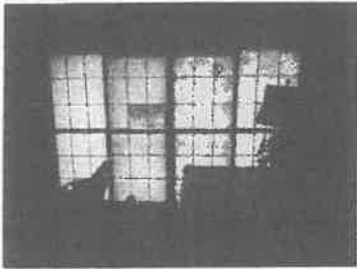
しかし、だいたい前にこういう考え方がふっと浮かんだ。「この毘沙門暮らしそのものが趣味である」と。なんだか気が楽になり、楽しくなった。



嬉しくなった。薪を割るのも、焚火を炊くのも、野菜を植えるのも、草花を植えて愛でるのも、日本間をアレンジメントして、それなりにかっこよくするのも、両炉を作るのも、お風呂に入るのも、ごみを捨てるのも、納屋で仕事をするのも、

そう、すべてが趣味なんだ、と思える瞬間があった。何だか、楽しくなった。なんだか意欲的になった。すべてが趣味なんだ。ここにいることそのものが、楽しくなった。そんな瞬間があった。もう、寂しくとも何でもない。肺がんで亡くなった妻のいないことだけが寂しさの原因であって、あ

< 月の明かりに驚く >



え、もう朝？
障子がやけに明るく光る。朝の割には眠気が離れない。可笑しなことだな、と思いつつ障子を開けた。真っ暗な

とのすべてなすことは、楽しくて、嬉しくてしょうがないのである。

趣味の暮らしを何歳まで続けるのか、それが今は最大の関心事である。

もう一つ気がついたことがある。ここに住む前は、近所の農家の人とそれなりに会話をしていた。ところがで、ある、ここの暮らしようになってほとんど顔も見えない日があるということ。農家の方々は朝の六時半には仕事場に、私はお風呂に家を出て、夜八時、夜七時に帰宅する日が四日間あるのだから、会うことはほとんどない。ここに住みついてからの方が、近所に会わないし、話も交わさない日が多くなってしまったかな。ま、焦らずに心がけていこうとは思ふ。そして、ここを「毘沙門くらぶ」と命名した。それは、ここを好いてくれる人が三々五々訪ねてくださるようにと。

かに月の明かりが煌々と…。静まり返った毘沙門の納屋に降り注ぐ月の光。カメラを向けるとフラッシュを焚かずに写真が撮れた。アイホーンの力であることは言うまでもないが、あまりにも明るくて庭に出てみた。自分の影が追ってくるほどの光の強さ。驚きのあまり、嬉しくなってしまった。猫が庭を横切る。目が合った。そのくらい明るい。

< めだかの水槽の藻に花が咲いた >



鈴木為之さんから頂いた黒めだかを飼っている水槽。餌をやりながら「この藻は、めだかが卵を産み付ける素敵な水藻だよ」と。実

際にその通りであった。死に絶えていた毘沙門めだかが再生した。小さな小さな黒めだかが、今年

はうじゃうじゃ、水槽の中を動き回っているのを感じる。この二～三日前のこと、水藻に花が咲いている。「わー鈴木為之さんの家の大きなプールのような水槽に咲いているのを同じだ。」感動して声が出た。鈴木さんの家ほどにはならないが、紙のような絹のような白い花びらが、1、2、3…なんと八輪も咲いているではないか、花の直径は10ミリほどである。それでも美しいし、可憐である。嬉しかったな

《レポート》

カーボンニュートラル（続）

8. アンモニア燃料

アンモニアは、無色透明の刺激臭のある気体ですが、アンモニア水として手に入る身近な物質です。主として天然ガスから作られた水素と空気中の窒素を高温高圧の条件下で反応させて作られています（ハーバーボッシュ法）。世界的に肥料の原料として大量生産され、流通しているので輸送や貯蔵のインフラも整備されています。そういった使い勝手の良いアンモニアが、水素と並んで脱炭素時代のエネルギーとして研究されています。

今研究が進められているのは、アンモニアは燃焼させても水素と同様に炭酸ガスを発生させないので、火力発電所で使う石炭にアンモニアを混ぜて使うことによって炭酸ガスの発生量を少なくしようという研究で、すでに国内の特定の発電所で実証実験が始まっています。そして2050年までに石炭を使わずにアンモニアだけを燃料とする火力発電所に改造して、炭酸ガス発生量をゼロにすることを目指しています。

もう一つの用途は、水素を輸送が容易なアンモニ

アという形に変えて運び、「キャリア（運び手）」としての活用です。

現在のアンモニアの製法では、原料となる水素を製造する際に炭酸ガスを出すとともに高温高压の条件下の反応なので、沢山のエネルギーが必要であり炭酸ガスを大量に発生させます。

原料とする水素をグリーン水素、或いは水素を作る際に発生する炭酸ガスを貯留させたブルー水素（注）に置き換えた生産方式、更にはよりマイ

9. 炭酸ガスの回収と貯留（CCS、CCUS）

火力発電所やセメント工場、或いは製鉄所などから様々なガスが発生していますが、その中から炭酸ガスを回収して貯留（CCS）及び再利用（CCUS）する研究が行われています。

回収の方法は、炭酸ガスを吸収する液体を使って化学的に分離する方法や、個体に吸着させる方法、膜で分離する方法等色々な方法が研究されています。回収分離した炭酸ガスを、貯めておくのが貯留で、今日本では海底の地中深く安全な場所にパイプから高压で炭酸ガスを送り込み、貯留する実験が始められています。炭酸ガスを貯留することが出来る隙間のある砂岩層と、その上に封じ込めた炭酸ガスが漏れださないように遮蔽する泥

10・蓄電

太陽光にしろ風力にしろ自然エネルギーによる発電は、例えば太陽光発電は夜間に発電できないとか、風力発電は風任せとか、安定な発電システムではありません。電力は需要と供給が一致していることが大原則なので、どうしても出力が不足する時にこれを補う調整電力が必要になります。火力発電や原子力発電は出力が安定しているのでこの調整電力として使われます。余った電力はどうするのかというと、余らないように出力制限、例えば太陽光発電の昼間の発電を抑えることをします。それはもったいないので余った電気を貯めておく、つまり蓄電或いは蓄電池が重要な存在となります。余った電力で水力発電に使用する水を揚水して、夜間に発電させる揚水発電もその一つです。揚水と同じ原理で重いものを挙げて、必

ずるな反応条件に改良した製造方式の研究が進められています。

（注）グレー水素・ブルー水素・グリーン水素：化石燃料から作られた水素をグレー水素、化石燃料から作られているが発生する炭酸ガスを回収した水素をブルー水素、再生電力を使用して水の電解で作られた水素をグリーン水素と定義しています。

岩層が重なった地層のある場所が、貯留ができる場所です。

回収した炭酸ガスを再利用する（CCUS）事も研究されています。その一例は火力発電所から出る炭酸ガスを回収して、メタネーション技術で都市ガスを作り出す研究です（メタネーションの項参照）。

貯留が実際に活用されている例として、アメリカでは、古い油井に炭酸ガスを注入して残った原油を取り出すことが行われています。

（CCUS：Carbon dioxide Capture Utilization and Storage の略）

要な時にそれを下ろすことで発電させる重力蓄電も実用化され始めています。

蓄電池はリチウムイオン電池が主流です。リチウムイオン電池は、今盛んに蓄電能力の向上を目指して研究が進められています。昼間の太陽光発電で得られた余った電気を水素に変えて貯蔵しておくのも有力な手段として考えられています。

将来は、住宅には太陽光パネルを設置し余った電力を備え付けの蓄電池に蓄えておく、或いは余った電力を水素に置き換えて配管あるいはカセットで家庭に送り家庭に備えられた燃料電池で自家発電および給湯を行う時代（水素社会の幾つかの例で挙げた宮城県富谷市の例）がやってきます。

（次回は、11. 部門別の温暖化炭酸ガスの発生量、を予定） 鈴木 為 之（山の根在住）

編集後記

新型コロナウイルスの感染状況をみると感染者の数は減少基調にある様だ。但しウイルス自体の構造が長い数珠状になっていて、変異し易いものとなっている様で、新たな型の変異ウイルスが出現する可能性はあるが、一方でワクチンの接種の浸透、新しい治療薬の完成等ウイルス対応の蓄積が進んでいる。最近ではコロナ対応の出口論が論じられ、屋外でのマスク無用論、外国からの入国制限の上限引き上げ等が実施される事になった。我々の社会、市民の活動の制約を、本来のあるべき活動にどこまで戻すのか、with コロナを意識しつつ真剣に模索する時期に来ているのではないかな。

事務局長 石 井 達 郎